乙二七部集

乙

へ 5
2184
1

菅雒庵由誓編

乙二七部集

書肆　巣枝堂蔵

[illegible]

明治　年四月廿四日
2184
一之二

もろこし文字のくせのことはいろはのうへ
とおもへどもいろいろ書く学文にあるくきは
世のかしこき人の詠を精さんにと覚束
なくいふかしと思ひて雅なる古のことはを
覚えをもまたは未知なるものつたなく知らぬと
いふに知れし松風の秋を便に紙の露ならず
うつくしく詠める和歌にも紙の露なる
ことはりを覚えたがへる人の事をうしなひし

つまの一首の字義をもしらず雅なと
いふ人は世に二ッ三ッをひとつに学
ぶ物まなびたるさの古歌を集めし出して
あつかふ世の手本家の名たかき句の
はしのしるしなどかたりあかしてまの心へ入れば
ことはり所の詞の意をさとすへし
き萬葉の古歌にまさるものなし耳をそろへ
まうしきこえて百人一首の釋のまてと

たとへば凡夫の俳諧も仏道なるべしとあそび
甫も猿が斧の名の為に照樺まで純し
あまりしものある哉

天保乙未秋七月

以蔵坊由誓

去年の秋松窓と書し流大旗を吹おこらせ大人乙太呂
きこえて松前箱館へおもむける時予が棲上に志ちぶく
とく先大盃をとりくみめぐりて見ちやし待ぬ竜と共
年八たちまつりぬれとまろらし候ふ此族御當家
雖英地久千二十浩交代の大將の部位のうちに托して一封の書
をおくりぬとくわしきよおもに斧の柄と以ふ集つくる序者
たのまれしをいふさてあらし斧の柄の名は老居するはあつく
おくれぬ持らば箱館にハわたりまし國の社風の魁布席し
ゆかしきものあるらんさうなる琉来里其外の上きものとも我は
くとくめぐくこゝを至る孫の七ッあるまでかへさねはやは
半くくみとそうの志て頃ハあたまを古すて松窓の為のまま

なお都清きをしみたれとゆかしきを席もちんと出て
ゆくまゝに有力のものやたのみあなたの矢越の崎より
かの峰の矢越の崎まてしるしもの弓ちからより出けり
矢野かくきをおくり侍りね

于時ハ辛未のとし
初冬もちかし亥の後日

棋園平角述

宮城縣圖書

斧の柄

浜千鳥子に来らするありゆきはちる　青標
篠ちるや流れに着るゝ笠のうち　精年
菜めし炭富を持たり　壬生の精　少雀
すゝしさや時雨の下ゆる　淀の町　桁園
雨石太播られおちの牛着物と
ゐかけたる舟のにわかに振られて
そも旅みとききんなりけれ　武さし坊　太呂
一むきり露けなかりき　枝ふるかな　兼人
舟の下によるさをとる日　枯野ちら　梅月
十六夜の月に見ゆる哉　ゆうかな　波静

藤野潔氏遺愛之記

ちらし菜の花にまじりし宿の庭　亀北
おきゆかし釣瓶へ入るはつねこゑ　李邨
持醍桶の蓋をとる水次おきそく　太亀
そのたびに母の箕や若木の葉　鮀柳
このもとの下飛雨す来そえり　星丘
山里や菜をたくさんにきくの花　月岬
残り関みえし
山伏に空車しいらぬ関尾かな　春窓
菊花に如くもさけ琵琶法師　浜凤
墨さしふのするあやかせかな　呂川
行きや粥煮るやうにすくしつ　呂洲
菜のはもちまきし黄なり山の町　其層

いや井日のはくおしかやめの花　湖帆
まくしさや荏の蓉むやう大ど　呂圭
立のぼる月より松ゆるくあけし　九村
卯月十日あける庭のさつきの
さくもあかれも
袷着てくれとはうまれて柿の花　甫来
桂女のおどしかたおりや灯とり虫　雀子
辻うてなお熱られたり小松しま　湖畔
残る紙かきこゑくも来るや水せむ　乙三
来てしさや菜耀かましき木の花　一口
松かせよあさて扇の叩きやしやう　とつ女
あきやつり声の届るあかり春の一　乙常

月よりは日なりけれど時雨かな　うらく

月の夜はまるくもあれや木がらし　三笑

家鴨なきに籾穀の花のちりかけり　志須

三條ハ小袖ながら探ねや御くらき　甫十

きくの香や寛加に叶ふ家の家　雨石

数多く咲き雨のふりこむ住居かな　文貨

九月十三日八箱館より引越しの馬屋て松前へゆくときある士八原五郎といふもの十五の悴にて弟と太呂と酒田の人なりと能登の塗物商人なりと荷物三箇とそて子といふ厂（ガン）の字と己らのりしまた七尺の多つかさ

鞍つけたりくつわはめて綱つけ侍しける六寸一の先なるにのぼ
てあるまませなほかにそのあるとものさすかに盐鰤をしゐねど
艸のにたちぬ銅壷を引連来りてかはときとうちならし
一里ばかりの間は列ととうとう踊りて歩みかねてや落ぬ
亀さはちなきをやまるあるを侍るかなとかく志つかなりぬ海辺十里
余ハ石ばかりの所河原いたりて其上を通ふ足きるハ氷を踏ふごと
くさきのいたぎきに出あしぬ山路にかかりて八新降のたかくそび
ちりての木陰ゆくく木の根岩石ときいはゆ河東ちりハ旅
今ことごとく渡りとる澤にやとおやまれぬる土ちかく危
きあらしハまり立て雲あるなりいる家来てさし立よりし
ありむすり付そられた物て宿あのつかまつり追ひ集めに馴ぬ
まいなくてそれてもちらくなりしきぬ府下まで二十五里ち内に知内

福山より東の方七里の山中ハけハしき峯のすみ〳〵多くして旅人の
ゆきゝも滞すといふ蝦夷の地ハ川多くありて然れとも橋なし只
雨ふれハ水まさりて流れはやく大小の川五十余ありて舟わたし
なきをも入れかゆる々馬士とても一夜逗留して川の減をまつ也
知内上下の三ヶ所ハ・キコヤリ・一の渡・箒ハ此まて馬の背に
負ひたる荷の川くまて急流もありて山水のおちくる時ハ
船渡をもわたりのむつかしき所ハ一の橋あり一つ阿を架き
より向ふへ木の根に結て高さ五尺ほとの所に橋を
かけたる馬より下りて橋をわたりて馬ハ馬士のとりて
ともに手に入りてあふれたる処の岸に着ね其いさ
にちかく木の間より家の屋根を見たり庄五郎ハ
此の所よりしてあるハ此の峠をこえて来るを

見るにアイノをしたかへて連れ来りあり此を
流川上よりアイノ馬に入りてむかひの岸に着かれを
いらく見るまて渉りて飛来る事あり其所まて
危急をたすく事に旅人にとりてきのふにかはる
様のある此ありきまやうもふとんたのみとちまかり
かうふりを伸ね諸果物を酒しゃけ しきてもてもらへ
あつかふれ
此の高士の家より二十四五里ほとに至て夜中飼
をね流ちく飼料の草なく早ありてもあつてれ二つこの
峠の頂上の奇なるる馬士の先立てあるかれ二ツの
寺といふに至りしは其の一ツを見てましきてかに
入れは十二三尺八九尺五尺よりおきいれ

きのかたに泉澤の傍よりわかれて一の渡りにいたる
あるハ知内より五里の深山嶽高頂なり
公義より府下箱館の往返の官吏のやすみところの
又南部家津軽家の諸士蝦夷地行役のおりから
旅人為にも茶屋のやうなる家ひとつ
建置かれて年々御金御米等を宛おこなはれてしまぬの者
住居なせりあくまでまかりて二里ばかりにして山骨出渓谷
せまりて四十八瀬をこしふかき流れあまた
ありて山中へ行きれた知内福島より御用状馬
かよふその先かれ茶屋ありてあやしく中径して逢流
なかなかも建られねばよしホルトな地より アイノとて呼のなれ
されてはなまし野ら中径ハアイノ等の住ども流よし

彼等か稗をつくをうる大なる家の北より大なる所にて
髪かけむさくるしくまくるかありかみ居りて傍らのみ
あかひあかきてゐやうなるをまつくなかおかれた
わらきるてかけのむくらなき渓あなかのたちやうにて
ろうふ八それそろきこゑメノコレ二人二十ばかり我人の
やうすなるによりなけて夕飯のまかなひもさするやうす
よく其の刻より火を焚わらりか傍よりあかく入ぬき
箸をたへあまても分かずとレヤモおるまなりあつしの
着物を用ゐしおされをみせて髪ハ青てり切おとし
かふりまきとふさりありふ見れば八耳の下まで
がんのくびの下のよりおし出されるがごとく口の下にま
入墨しまがり黒き下の二寸くらゐもある彼ども開ね

はかりごとゝ人なきしく遠竄するかあつしの窦袖より
ちらりと外出させもれえたるメノコレによりてかゝるを
網の目結の下へ来てさなく あらんとそ かくりハもなと
いひかけりハ七といふふろしきをとりて常体の女化
ゐつけるにエヤモを掌にせ侍る者へ紛しともなふ
晒れも山嶋の娘子もかちあるーるを辰之郎なりしか
一疋の馬のくらをもるも縁の下に追ひ出つ 尺もなけるか
いかやくらをとも見えず縁をかけて襁褓に乗せ行く
そうしてやられ居るを呼かへし進ませて連来るに
かし此我ハ二尺いつかへなるか袈裟さげしかへして
立ゐり附記の通なかるまでをわかるくよしさげし申し
みはなしか共に素の毒なるさがして外に出て見れバ

さうし居るものをとりてをなといふ例のメノコレを呼出していふやう
おのれも内の事を書きめて二尺の子をよく象りて
いふにハ野飼おなをやくと来出させて襁褓に
ゆらゆら乗せれどもやく尾花もらへるハもんさし
ちかりと乗せゆく龍うしあふ彼ハ元々ありふき
さらくのもありうちあらし彼けなげなるこそ此で
居るにぞ彼馬を見付出して襁褓もて追なく来る
はかるなよのへゆるにおのこ乃只なきいれあるねとまうし上れ
ありきし
山の晦に年をふくく門ーとる松立てーしまるを
見るに此よりそのなけれハ熊笹をふしもえれとも
左右の松に結びのハーしなるか棍をもなすりて三尺たる子

して畢ハやゝあるにしきのめづらしく見なれぬ礼
者の入くる家きは例の蓬莱喰つミの具の類をかざり
床にハ雛を飾菱餅をそなへまた雛かざりハ京の人形
よろづうつくしき衣裳を着せたるハ伏見庄内秋田よりおほく
運び来る土人形など立並たる家ありけりのうち江戸の錦繪
を絵紙とよびおほくもちまうでけて
兒女の目をよろこばしむ是ハ雛まつる比なりけらし
鰊の漁猟のいそがしくもあらぬひまぶにあけれハ塗
三日を取鰊りものとして鰊のおりるを方言に群来(クキ)るといふ
喰ふものゝすくなきを恐れて沖近く来ぬ迄よりより
春の彼岸より四月朔日まで火街ハ不論時するが鐘ほるゝ宿
の紙きるを揚る挽をきくへきうれ群来(キ)るハ子を産(ヒル)為なれば

てその奥の居るうきられ海水にくまゝく変じなけれバ
その中へ掃やくの妙なけれバ実る流とくうち夜佳
きれらるに今れ箆鐃枝前ら群来るなく松前より
十八里東北江刺なりつて大漁粉れるまそ千の
ばらと揚る舟なく江州の出店多く諸国の舟集ひ
あれて世さん繁昌の地のひとつの内さ伝るなる雑縁の
たゞめに層を積に盃とりあそびて葉を採ねよりつきの香
冬にあふれ七西山にとまりてちとらあお頃に入
任合せし後の一とくあるものにて往とらに亀田の御代の丘
より川の邊よりきそくのそめ土ちまるみのゝち形勝と
しろすゝかに健てし往なれそのえをなきる所ハ断續しろく
箕裡に兼後を隠きとしなりと云ふむさしの延水

この集のなくさに較しそれはしてもよまゝ一ノ来舎の
南にありて日々吟咏須に對せしむこれ主人山八先生賓客
のきらし代々丘八仙亭家の陣の僧坐あまりしとも?

斧の柄と名つけて僑居す

ころつし所

折栄のちとわれはしれや猿のさる　乙二
あらはし　
さもわるとたのむしはのこゝろ　仝
ぬくもりのきたるあらし　宝峩　来車
米くらう謡に入し川ははるく　二
まつの長者の松のこのせらく　車

落とれかみの日暮をしかふやれ　二
あらきなの生しまちくみ翁のやかるゝ露　車
迷ひ子のゆえるに待る親をるんで　二
蹴あれより旅化われるしとまる　車
並び坂夜行くるあつて乱亭隣の飢　二
ここのやくあるまなちうしては家　車
秋ふとても後のところや老を衣も　二
冬をまたあきかしつるむしろ帆　車
おほゆくまみ上すくもれ団扇ちるあけ　二
扇枝のうけしもし旅をおそれも　車
朝やなそことに涌彦のこれ　二
さうつくり気をとるあつる児違　車

雛壺のうれそうよみ出し絶えして
めあはれむしまろのこゝろなる
ありそのうらく儀りまあし秋の錦
をうきゝ八ナし木の風まつかへ
蘆庵火を面るやりておくま江
家くゝ色のおもてなつてしん
まろやきこもかけ鶏とよみつ元て
流りまつやとし十はくろ所
情まる肩とし歩けま様はつ千年
わらのまのよひつきりれ
山きくゝる節のあさ杣なり
弓とあそびしのあそらくの日

二車二車二車二車二仝車二

路むしきえせしくし人のたむくの此
ひ飛く浮のすゝきくすむ
待すされきそのむきを色たむそこれ
あ気しゝを色のくをゝ　清　鯉
老丈婦花のらわさよろ郁元
荻子の苗とし木爪ろう色て
うゝもう作の世色を白雁の通くり
みのましよまゆう　偶のいこきり
是ふたお南嘆まつもえとあをもゆきら
去年てかゝ何と歎夫の千まふも陸られ
あゝよて東西の艇そ地きよふ始めく

二車二車二車二車

美行の上鋪百卓を備ふる所へおかれて
口上なる歎州木筆等の名席の下に並べらるる大々子
造るのありさまあれば書のせる席を設ど
赤色らされたる雅人團欒の時の談柄
に備ふるのみ

読むぬやさとしきえるたる為なれ
あやめわきしさしえるくはなるなり
海わくらぬ無量の毒ある標なる
速なる盤のきよう流えざるとの
名月よ人の何かくはあるはなり
細かりうると水そえそきはれふかき
ふつわれ 楳 柾 刈 菫 お頭さく
識の所しく深するゐるく 花へ何とも
きものきされる飼ふ宿のあきしめ
あるのいつりくゆきくいく 山彦
照くのしかさくくまする両の中より

子
乙

張二張二張二張二張二張

江戸のたのしミハ月と雪にかきらんし
とのゝ炉やくし子火桶のほとりのこゝろ
小庵にしつかなる冬の筆
白雲をなかめつゝ鮮し笑謡の詠
折ふしゝ作る梅が一青をかゝる
世のあはれむあはれしくしに花に香て
以つゝたうちの鵆の声をきゝそめし風
三絃の調をかきまれて入し法蓮の間
隣しからみえるふとさうの留
芭蕉翁このむさいし抗仕翁
おもれなるあのおもしろき花の風
ちかきにとりかゝれし歌 濱

二階二、階二階二階二階二

山めて言らん山ハむくの風
陸奥とかねとけふおもし旅の年
わすれき畠を見るく出の沢の
麻の袂をくの旅人をも月にのほし
済のなくさより秋をあはる
魚に香を味噌漉にせさく谷へされ
にけハちりわとあのゆかさし之
ちらむかの会佛のつかる小見山
子のくたしら味見もとふし
義あかれあし髪のみえる旅の上
引出す揖のさハ戸の屋
花の香につふもこられも白ふと

階二階二階二階、階二階

五形とられも賀はまる春

蓬莱ハくつまじきめのかふ肉
ふされハ羲をくらし猩々の穴
ありまのうまもしくわるみまれハ
卯月来の陰日七里濱をとるとて
老波めの蛤なしふく何りくこ嶋さは
孫子初句まうお振る友ならぬ流

画讃
茅隋
春信
南壺

御かさの庵や波にぬれしくても有る　衫亭
烏賊つるともしびも甍きらくと舟の露　恒二
草鞋ぬく旅もたのしきくの秋　祖庸
あの三人八仙蓬領金　書八吉次ら
諸ち手しところに倚りおりちちの代
よりはぬれける網商人し
山松や実方よりきこしる流　一玉
ちりもおちしおちらしまきなれども
見し網の目をみれぬ人なり
涼みをかりしに井をそきしろ　三松
氷くり袖にうきなりくいつり袋　暁雨
見えつかはしし七面山をくるとき

斧の柄のくちをなかわやりて
竹の月のうち流れてやみく仮り月流
風ふきかけしかたはなり池の蛙　文彦
おきれ森五鋲大畑まうし手舟り
の牡丹席の方く来りて移り人　其流
眠さりの木もなき皆の恵方か
策あむや針の幕しいつも由る　江越
鱒よせの西向きおりしのなかや　其水
舟詠なりし山かる気をしもなれ　来車
けふはおぼれし
つゆのしく岩手の山れこきまで　佳祥
春雨れくりの古ふるまま　月圃

女ならでさはらぬものゝ文し
とらし家の是香と流あるより　下苗舟
切て鰹するものたよりもしらぬ蛙出せ
りやうきもきゝたまへにありし　蘭党の
淋しさたくやさし旅亜舟の乙隣の古の地
のことなはぞりさ流令なり
松の花あてらくらもとこの枝　風叟
二日月や稲つむ舟の片ほとり　不流
加賀両句つくし
よし何うらをし覚えし
何それの千代をしたつしる西行くり　松山女
まて花八せきれぼしきしに小らの糸　李副

猿の松うへ来らし宿の花　招月
日ころくゝもう色中ちる
わすれてものすゝめすゝやくる上す　素月
火桶ならやうく落しき掃目か　菜女
老師を予か鶴跡見るとわらし
行物は古白千月ハせうなり　旦水
まし花のまなし飛来の酒流し　鉢女
一ト来舎にみそら流して
大まちやころもの来れ朝おけ　仙鳥
蒿生業は棒なや酒の碑　路秀
又未の山みらまれあいつし松お
そうゆうしなのわくゝせかかさきく

新露の志らくれまゝ橋けり
来りえてつまゝしたゆくけふまよりより
錦さらぬ扇ふかしうて海もはなえ
色めかもゆかしまうてさもまされ 常晧

姫るもか浮をもすれし瑚とも 乙二

歌よる髪まち人八千歳をよ流し
きぬ縁より亜吏の倒なりける、
那麻に伴りける

接接流しもとしさうり暇たびし姫 太呂
はくしも姫君う千路のもとへ花
なうれる人もわかくれてちまんし
いか慈悲の親かなし

花あ流る八世も老る人もある風
やよし乙にようんかとつと御井まて
笑とハまる人あるまし 布席

蓉季の来ぬらし老るの路ふり
路も見義経のかくれ跡し
なりてありしよりふよそ、

鵜の（ウノ）はな（ハナ）もとつと（トキス）ゆるけ（ヨス）路の波（コイ）
けさ（ニシヤツタ）紅（トヨツ）さのけ（アツナ）しとも此ふ（イヌキ）梅くの春（シユ） 乙二

大野の里根月に詐ひり途中
昔としとうりて大とうし舎の木にをきうり 来車

洛外にありて

あのやうに菖蒲着てもきくの花　乙二

旅のあつかれ荻ふかりよる藻ゝ　布席

浦嶋が子のゆかりなきあとなれや　二

宵ねたしきりかておもろき月　席

ねくのこやくけふりを風のさそれゆき　二

木槿の花北としきりも散れ　席

小佛と云しあわれな関守し　二

志ぐれのしめりかつる　皿鉢　席

ふろしきの側へ炙りを出して寄　二

松をおもし　若輩の中　席

きしきうは香の候世てものちり　二

椎うりはなかりし　蝶もよくなり　席

袂あるくもの沫にすくみもあつれして　二

淀野より　根を残してそ寒る　席

廿むく園のえつくのさくゝくと　二

山をふりかえりし　あつすきり　席

ふく夕せにくさききら月のきえかかり　二

柄杓のみをとりふ流むし　の音　席

夾き通る絵の菜黄のおもしろけり　二

何を鍛やらむ　むとり　箕をひる　、

落らんや反つけ　蓍粧亀の屈て　席

蕘干ひおもあしめ　子好　二

蒼家倉の神わて以うなる　神やらん　席

まくらのうへにのこるらしか哉
蛙つけ芸をねらねうらをかけり
言くるなた枕ありしかよるよく
き栗の俳諧をゑるし月夢見を
抑ぬききから木下流すくるき
わるしと外に声あきぬの一息
蝶吹てほりく名ところのむしし
きのふまで論にあかのふりうを
ゑかうとなくふ隔の鬼とし
に我孫よしいふまれ作と言くゑて
日のさすうしまわるむの香
夏の分に佳のうしをとみ知れせ
叢夏へ如流うちのきかくに

二席二席二席二席二、席二席

抑も古人のむかしの風韻をねて句作を一途に
さ流行におつもす人に多かりしと思ふ天下の下に
と呼ましもの常に誹諧師の坊のにくせを耳にふれ
おゐて其境のおもむきなくて年月を過し初めあるは
蕉桃青大の句集を見るにも。ゆるかるあつまる雁も
ほのさく。ぬりもの上にちよむかし時雨かと。いふ直
あ龍（途）に眼をとまり。露のさうしかるるもの
雛の新奇の躰。湖の水まさりけり五月雨の。ちとし
はりもかきしものに木のこのみのあをむ風にその
人を想像しはるけきをぬふかとあこやめ

八揩集を笑しく気先をかへりし角をれとはふ田
家の山子のあるかる洒落る風里ゟせざする志られハ
中七字の草躰よちのかあり初雪や比良の山獄の揩律
として夜の之の借の羽實の類ひ不大家の全躰をとる
るそのたぐひはむ白神のうしろの浦へ走りて流れ出る宮鼓
の時人とも老の果ねはも世の人のりとのなぞり師の坊を
この時はむかしのいろくすさせふりみて来るしく小言をうけたる
うれしくは立圃がうまなるものそれよれまゐりて何の道か
はふれいやとよ馬の耳骨無の風などいままのりて徳なら
もせうし書のとされもくたれ〳〵かあ内あいまし直る流
上方まその今でくあきふくところべくさすつてふ井なやく
まゐる此集をとみれん人よしく　揩八先笑く屋を笑

いくちくとはふるを走りえるまたけとはそふまふせるく書

布席
雁来舎とは
人の名を浪ふ

かゝりとけ
あとし保まのちう究ふるさとなる太呂法師はおきし是を
也てしきせくさり女犯の数ふ加り是をきとうて七月の未
御葬のこのひかせされろくやまれされと枝なきとり人に
たまけれてしよろつあくろきろきしさあるみえなきはく不
社裏の少焉りはむかひさこのてとゝむ係よ止りたまなきねかえし
呂法はおりきつられかくくさし金剛力士とたのもらく家の徳表記
をて松前の記書標ろ伴へ送りよんろくせぬたく書標を初め
彼地の停られ良東のよとおゝ重陽の盃めくてくりかはと
をくるしあくらよまの世たへとすしかうられ済く菓於に煙の
絶はあやまゝちぬ衣ちかのゐろまゝ兵のまろしさあしのかかり
先もんえみかくて八秋もおろく於那の怒潮八布帆寿あく

越ゆれどもゆかしく聲の戸に吹かるゝ外の濱かぜ狩山の嵐
神かくる方には物ありつあらしそゝく渡津の音楽を乞くれ所を
ゆるさく風あらさくの諸にめて三とせにこそれ西せしち
あらしすてつゝ一死あはこゝにとまりやされけめ
それは赤斧の柄と名つけ處をやしなふは我松窓老師之
まうく舎には名なふれまれらるゝに名をきしたよりたるにまくの
きらのえの徒は何ちちゝきし不流に何つけゝく我何筐鎗を
立ち給ふは弥生月九日なりけり
蓋ふまくらの松より出し舟まて
七重濱の左り右に七面の山は何りまの雲わさまりて甚部
の嶽は其の項すること公明遠て立るか遠くなれ望み
ちらくなれとうか言ろし

茂辺地をはなれて
ゆく方へうつる箱館のみなとしられ
當別の渡の朝臣の墳も大潮の間引のこるまゝはとも
あしきにらんも井流路を汐の朝臣とて呼つゝゆくに汐の
こなりさるゝ集て猶こなえにあるおそはれ無心の人にはあはれ
拾ふし呼しら

鶯をよみ風
孤と憶記せし
うみこゝち
金槐集を
閲するに一首
吾も八段ウ

さてたてと出て當別とつゝ得るかく風藻とくれに
ぬまろく路の孤存くる何ゆうなじりちゝきし歌川に
歌はての流するさに来ぬとおもふは実朝のよめ風
鶯なりふかかく未雨もかなし哀れみにきつけて
堺やる身の知るとあるらつせ見る際の朝臣の

蹟とおもへるにけふなかく越のよる方をしあけゆく
きよくにおしつる極に旅のたのめなきしるし

月さへ今ふかゝらぬあはれかな

ありて風磯家かゝやくし　やどる月　松窓

暮に来ハ世をもかくさん　花の今宵　〃

半崎の何かし々集にまじはりてをの
なを眺し　高別をおしむとはやする

泉澤にやどりをとる　おのづからおもふにあはれやるかたもなき人何事にしあて
むかしかゝるところにまうで奥まりて書四紙をしおくにけり持佛堂
あるところに遠くひらける戸のすき間よりのぞくに身あからめて
もろこしの山もそかよくしさらるにかる

詠やられ　畔やう越しぬ　屋根のうへ

陸かさなりて竹のしげくある所あり此ゆきさきのかたるを
知閑の奥に態佐作く人を進めて温泉の處にすむ塊吏
のはた射く見れたりきこえあれとおそりて此宿に十一人
やとり居にすへとありて実否を決て此山の人々と越
たまへとて父母にある身のおやくきよのなむハよろふね
るにあれた何かしのいはふにおもひ往つ
十日も同し所にありたる人の道路氏より振けた酒たく庭担
なるへく湯あるに態いはらくきつの射とめるあたりの人と皆
いはくるまで道の路を待十日あまりきし春の日かけを進みゆく
知閑山中なる入口に抗るいろあく老樹をみ御阪田く三百と
ある侯の鴨を取らし肖ふきおろしよあきえて戴くの
とらつくるに叶なんからかゝく四方を白まかれる一の俗りの

ひとつ家にゆかり来ぬ　あるハふるさとに狼も里にまかる
けもの〻思ひなすにしもの深山ならくたくへ気あるにも
うきよをはなれし二本の松の木に構ひて庵させ泉澤より傳ふ
そのこゝもかゝらく背をあまりの額をはさめかの燈のかの誘り
まくて蕉をとしるあるちにされと懐旧のむかしに愛しき
ひとりてやうて

志らく飛交大黒田甚　あかし蕉翁の座右
ある其の春　都にありし月画居八志らく収ねて温雅端正なる容
の像をなしあつすの命のたしにおこし推乃那るを望むる卉薫
そのろおふせくる　其かくハらにハかの庵ふまあれたれ八にのまし　の
媼かあくしてことしハふりきまりて隠き住し　されのちしめて
あらむらるに　貼をしあれハなとし　炭にゆかりに窓を押て

さつきのちきや松の縁のらん
かくは明けらくさのめに逢ぬるもとおわりくるあるさらむ志をり
をせめらくの葉とす
ミラフ。家の聚。子モリとるとて森にすみ徳明まつる旅
のすれ積疊樓のこゆるこほうしまて馬より来ぬ
あるに我家何り山の西かし
斧の柄ハ
戸口より先のそときなり　左火桶
あくあふるのあかにあるうきみるく燕子に飛きし

翁記

布席記

さびしさの夕めし時の我佛　乙二
何を折てもわかて若梅　星左
餅を落すうしろの竹の鳴そめて　乙國
ふくりあらくゝに魸桶をさげ川　甫十
三日月に藻かもぬれむむく色や　青標
山おいこゝゆかずて大せつか窓　雨石
抱ふ子の中に烙笑の穿る香て　几村
冬ことの去く淀の川も　春窓
めぐゝとかきり焚火のおえ去り　李邦
國を羽おしゆれきえの来る　松甫
栋をひふうさくまちからむん　湖畔
松子小半川八根かしなとて　波静

木母寺八月さしかゝる涌　月岬
家々の遊ひもぬく　甫来
蓬萋に足よもひのきりす　依月
おもひ出し八さかゝの葉　三笑
咲花の七日のうちに葉さこ　文貨
きゝへに順おしきやる　未亀
うすくなる風の吹ゆ　湛凡
丹波八まとし遠き吹の　一口
雀飼年のかゝかも　こゝ女
達の木すゝず　亀兆
あい益の福にまきて　其凡
綿羊なにかゝる人く　菪岳

一日千里ありハ外ヶ濱　鶴子
まつやまなき西行の跡　湖帆
有明にまよふ蕉を思ひ　乾葉 草璐

右

一頌

あの日岳翁のたそがれに江刺に入りて登山ちよくまんと
いふ扁の額をしおがみ

初年ももれてたせん足の行くも

からまの風に吹かれに座きし松島にたちまれ清輝の隈なく　来車
て出羽の風もうしろ一筋かの雲もやるもいくつあらん八

きさきさしの跡を来まかせかな月は今青　太呂

老師ことせ我里にありし居を松府のありの君も何も名

をしらふと何る跡のくよりに病たまふすることも常しかれと
たゞにまかりぬ

我人のこゝも斧の柄きぬの気

此地同盟の業をおもに入したは師の衣鉢をあらため
かくちる風雅の微きをひとへに得ぬとかくしてかく秋の
四五日よりなきさもまた國名あるらは志られ余
支兎て一のみてたのしく風雅席ハおもく素まして
侍るまゝおそれることにほすまゝ七十余の老翁の人あら
いまゝしたましきぬ太平によろこぼしぬ　略
甘荒谷より出で来る人十人を雇ひて峠越ますまゝ　一来
何ゝおもふもを深き谷へ来る入れゝ何の来やまゝ来き
こいなく越るゝ山懐にいつもこえるまゝ来て

背にかのゝえかゝりたゝめかけ月角ありて我にかへり
きるをとこる
手形て夜に入あり見まちの庵
声してやゝありてあさきの腰に
眺のまゝ老ハかりくの手ならひ
右
松前より箕輪へ通る飛行
中の日を載
筆頭誌
捨かるやを余りきぬかも小野との花
あ越なりけり 史 補 加 す
乙 二
布席

すゝしろのまきれて来や為ふん
おきかくとさしてに飯さる
香まませぬ月まとんもの降るく
荒の寒くも八秋の宸牛
何くれ気もせんかさへの気をさて
うせの坊やむ大寺の軒
織帽子と菊の作りき あの家
あてく八焼く花 天 明の数
なく老さるに非得の路のさてなれ
すゝしろもとて木からくれの月
支蔑をせて梁田の咲きに喰れたり
余年 筆 部て 雅なに 苗なく

二席 二席 二席 二席 二席 二席

狙のさわぐちさきし家持がな　二

咲ちるこえすれハ虚ハ川ねるら　庸

標ある所との人なじみ妻つかふ　、

三のまくつさるくもあす麻蘇　二

七くりの涅槃の香にまめる幣袋　来車

嗅子にたのあくのこまかゝん　芝琚

りかもすし多一脈きよくミす砂吹て　車

辛格賀の雨も同し墓の木　琚

村つれぬこまへ庄も多くの為　車

京の奴とかあらく　唐海　琚

鉄拐のよくひ笑ひの雨と降　車

子のゆくし千　元加笑様をする　琚

京の是非わ多のときりハえれ芳　車

つれし猿ろ守るにあすろ秋　琚

山とちろや澤せる所の冬うづ　車

のこる梅の霊も情ふしる扇　琚

嚔すゐ穴に賦宗のぬけてかき　車

脚を舟りえて其と妻ね門　琚

うつまりよりて見ゆ妹のぬれわれ　車

信濃ふたのもとまつのまくゐきし　琚

花さして今朝ハくやしき気のうし　青標

おもしろのきろが法黄の五月　太呂

そのかみ、三日月をめでゝ今はあとなき名残も
さらにこそ。ふる芭蕉の句かきて帷さらつきに向ふる
その琴をもゆるさるゝものゝものを東子とする
芭蕉の径をもつたひ来て硯をとるものゝ筆をとるを
むすびおかれてそとたまるものゝ竟へ大嶺城北山荘の
揺落あり、人々のなの扇子に書きけり。この折しの卓に
うかみけるかば、遠情、高くも寄る旅の畫に新旧の寄を
なくて、さらぬことまたものに風して一人、入居らずの嶺の
うちにかゝ世の翁、すまぐもとなりかゝるも筆をいれ名残
ゆくのふき同集一にして吸物を作りていふ寛永
春からはなほ世のなかの風さへまさに定と体のなし事へ
是映。此ゆのうちとなる旅寝かな。

文化酉冬

松窓乙二

耳さらへ集序

莒舘の布席には比泉下に帰とりとみちのくゑとの
ふところを見えきくの人くしをもてはれふるせしかあれ
一行の序書都事作りの胡地にとらむ作人のおとつまし
生さむかしてら作さかきりおし疾ゑつき見するに歌傑
二あまきの齢なきにたはむといいましし官職を統すりとも
あさハ次星を作くき氷をふめりもとし松窓の此地に
いまして門人のあめに説おく作るとのおくれはさつるに
御負のすくらとおもしもてんも我黨の罪なめりも
梓にあらしめて同士の人くに伝へまほしくそのはし
書すてまなり　先冊にここに存す翁在世のむかし
眸をなこつせ唇をしうちゆふりて咄くせる　彼の目に

うつゝ肝に志みわたりて芳しとおもふなるハ先人の徳ん
まとといふ事とわざにも似かよひとて世上の人のたふとび
のこしるとりあつめハあらかじめの後と一具老禿備
祖右肩して志る焉

天保二辛卯秋

うらいちに出て追分の丹波越　許六
去年から隠れぬものゝ閉る窓　去来
細道に網から分や秋の紀　曽良
黄昏さし道の山より外にて
出立うしのゝ船出するや秋の紀と
書風きれいなる故いつまでも分ちと
ありける事を味ふべし許六ハ所々の
人なれと丹波越なるも所々ありなと
其の趣向に丹波越を奥羽の人の
似合へるときハよろしく
去年ふれも常盤木あのいとをしき　去来

此の句十七字にてよみし也　作者ハさる
由なる所に趣向あるを志らず京坂の人の
眼にてなるものをすらすらとかろく作るを
流行とおもへる句作に惜しきよしなれ
とやすらき所に力ありて句のおもしろみある
ことなりての冬至の雨の空に市女笠着て
歩行ハ懐にいふさしふりの事ハあまり行
ありのまゝせつなく源氏全代の太刀を抜ぎ
つらきるはあまりくありとおほえ侍るべし
雨の降るもよき宿とおもはれしそのある
くらき宿とハ思ふなるよきもおもしろしと
も思はれなすべし　俗にいふよき宿

仝

にハあらず初手のまりと宝るより老人
える也し

鶯の来るくるめつらん春の餅　嵐雪

華を待ちて餅にするとハやすくする
燗の香もありかさるを中く人の心はかく
ものまき色をつくりいすとハまことし
みぬとういふより春の景物第一の鶯
の来るを深つれとハあつらきいの句なく
言葉ハ見る風人になさけあり
人をして垂れきもし人をも重ねるハ
老成の手段ゑ人をそら向かはしるしき
句にしるべし

仝

たゝまへるゝ　蟷螂かうしろねらひ卆　仝

蟷螂かくらへきをえらひ鯉鮒の類
あくせ切封のふミなるべしとねらふこと
蟷螂ハよきねらひの体なり蟷螂とつきし
ものにて古き落ですみても　蟷螂の
ためを失ひれしで十七字の句にせす
去のくへすりて

芙蓉の花や情くの身なるべかなるとき　仝

まつへいよき人に見ゆる芙蓉の実
をつみなきをとゞめ仕合せより芙蓉の花や
情こゝし蟷螂かうしろの句にかゝる時ハ
めされる時さらふ芙蓉の根枝軒

猿曳ニ這かゝりてあるもの見へかゝるの字
無用く

そのときに書なきし宿のなきなむ讀　仝

真實にて妙なる句作を求め持る
団ハ作に持せられて實を失ひ夕暮
の作の句をの外法ものする書なき者
も老練の人へ夢に讀を流めあると
そし

仕合な咀の松のなかに今よめ月　仝

仕合なとハ風流風韻をあらくせさし
ましたる一ことに　蓼太が名月や生れ
られは峯の松の句も古人の意をかねて

あつかはしき嵐雪の句に比しては
生れかはる梅さへけふ芳流
さゞ浪やさんかめうして梅る一ノ　尚白
江のかめのかくしありとめ梅一枝のみ　仝
尚白ハ大津の人なりし湖水を帯して
住なり實景ハ江の梅も尚白なりて詠く
雑梅をおもて旅の旅
まこのきし梅の根を見ハ士大根　仝
よく古人の意を得たりまいの風雅を師
とする人ハ河されたやうさき心のふしを
一句に得るなるへし
人中をわたり給へや市のまれ　露川

あさ先に手をとる木の乙や椿わし　荷兮
右の句ハ三都まて解きかたし
さて梅也木食寺の料理人　史邦
山崎にある木食寺の句なり料理人とハ
其寺の意を解せしは多く八朝朗なりく
京て後は当常林の句を守る也斯下
ら八十七家つきりの発書を見たるも師となし
なれ共古へあるに稀なる梅子くらて翁梅かう
のはの俎板への世をくさく去れ梅の菜
ある□かな不知のこと
園嶋のまつりにさきぬ　葉雞　凡兆
東海道の長濱都をあまね八洛東之

つきみてきぬ鷄以うやよく老へ題
題さし古人ハつきんなりてきこゆ露され
影の姿を詠る画へる風報しありて菊の
是詩を作りかん九月十三日之祭の日ハ菊之
気女集とそ勢出てたまるを俳で
是詩へ来りそうふの拾よりも人集
まさる此の事の志つかある影詩のえき
る善き菊なりしの其本よりしたる余情さそ
志来りたさ歌を得ん八雁の声ならと吹出て
初子のもりたよりあき趣面の名あるこ
何とおく此八日き秋の夜描かな
来られてよくきこゆるあるを秋寒集る

兀峰

作者のおもふあらし考起し
あるうもや指をささす流宇都の山　鼎山
其の余情ハ以うて
としよりて牛の家ふり茑のこち　木導
宇都の山ハ伊勢物語にありしハ此細くて
茑の下露よりやし一ぞ殊人文
人茑をよみし所を世に伝る這出て茑も芽
をあらたつの山を頭句とし指をさすると
此ふハ袖様あるく物にとりて指の爪
さきめ作てつめくたる余情ありて
指をさす人るあらる句作あり
作ちあるともやらうしまる事あるかな

英子

まはらなすゝき躰はくるしきところ
虫喰ありかくてきしんを字あるらる主
手よき句なり
秋来ハ鰍にくたびれぬ伏見の枕　嵐文
素袍の字大ふすの御供の風流らし
古人のことくてある親偏りて新ありてあらく
あるまじ飛脚なり
去年もや咲たるはる流 あらましさらる　鬼貫
鬼つぶれる事の細つきに逢やなくれて
ひとつる深き先き見へし　古き集にいづる
文日新都日々にあとしをさかる句を
こゝを御あてあれなるとハ十七字の的

廿次元人の手間の宮古まゝ見たり
たり真篆放飄逸なり
大連て給わんきせれえ方のいか　仝
ひの字まてえたらうつまつくら
お家さ手初心あるまのし時あの
字わたく工まきへし白初ふくらを
まろうきつあのしとらえ初の字脈ら
老功の人の句をとて気象を表す
さあり事一段なり
家鴨らしおあ人なし比中の鴨　仝
まあらの初めすくえてうきくあかり　仝
あの句とかハ十七字の作者の骨子

くりかへして此一句をなほさりにおもひしに
また境ある人解し捨てゝは鬼ほうろう
あろうにあれかし

仝

鶏の雛すあやめ青かりけり

蕗の薹子餐ほうさる田舎あ處

可登

此二句かくほうれすありさしかるし
あまりてぞ遠あくもを美あらて詠めあめ
よそくつくりかちあれ大古人ありて
趣深白うるをみつけり

わすれらきしらぬ時鳥のきえくれれ

来山

ちれ蝶あれ紫すめつきあり

仝

紀ほうて遊ぶもまれの夢にの花

仝

心をかけてつくりたる句あれハ便りよきあ
きらすうて作者の物知と老るる
やまらすて書ても花の句なきえ
てありつのし

梅の句とかや気まりく
年年年あして六十一家群をなす
しらく白異おるれ

梅の花にあらくあそさすあかれ

仝

と思ひて春ともなやらる路に来山
実あて感ほうれ

西月をこぞ来てくらして二月れ

秋風

何ろよく似るろ寄麻とほきま

風流の言葉にまかれあらん
淋しさや禪より次六の月　素堂
あらおもしろきことゝもおもしろき禪宗
はなれく縁伝への気色もしれより
侍る乙標身のからきすのあるまり
まくまれすあのはる律くるかな
のあれ于能籍ありて出家集の趣
きめてよきすゞよしされとも躰
ちからさくて禪にしさらぬに大要
まへれよれるし
さあれしときのかのきくを柳かな　全
やせらうかあるうくすに古人の心にありて

うらやましき白とつゝみ飯しえな
きくしくゆく十日の菊のかぶるも
情ひ総にのまあり
洒山の志く以実合小庵の人　支考
あつくの五の堂の我庵の自然
まゆ白の時ハ作者の哉不をへ
しるべし此ハ湖水西八日枝山のまゝ
あるし始く我心ちも先そして解夫
露のしくれ
あるときハ其のゝ過ぐる所ある様
様とあって十七字ハくりの葉白ま
世にはちきの奴僕にあぶなとを　野坡

かねてしも箸の句の表座もあるに
とめて茶をのめとあるにて是より句の上
よみ外ハつくりもすこしもなし

茶をのめと茶袖にふるしくれハ　晩坡

茶をのめといへるにより此句を
ゆへなくこゝろ風情し外の趣をもとむ
云やうあて云易き案する句をも
其へ茶をのめと茶をかけ合て
けたる此十五文字を発句ともいふ例
をしるとて上文のくすけし

炭屋にはやしらうき風呂のたき　其角

備しかつくるとハ中々作り得るは

よきしたる一句に出るをたゝ
やまじき作にきこゆ　嘯

進上に書きなれるや梅の花　公

此句一かとりに解せんときハ忠兼あれ
やうかはらで梅の本懐なし此句も
あつかひ作者のよろしきハ辞列やう
ふ叶所にハ後えも記するところをとうて
いるもの也すなわち疎影横
斜水深浅暗香浮動月黄昏
およひ林和靖か七言律に梅を作
りたる句の名句なりとて唐も大和

もとてもかすし梅と雀を落て
梅妻雀子とやくり初の句に句ハせ
去られハこそ又ふれはあり暁ハなき
ありて又されをいふにて習ひするもそれ
なり此ふたつ咲梅に苔やうめの色と
晋子の句何となく横ハ斜のはめくし

朝夕やいつれともなし東の梅　公雄

いよく又それ何かれのかうおはち隣
なきくとぞ云るも梅の本情を去らる
ことのなり

眉僧房

何ましなく関伽のお花子色菓子　其角

樒む閼伽のさくきにふちかくも何ん
何しきのむとまらまくと以本西上人の
歌もちと見ん

梅二ける花をえらう

梅はくつ何もの花をしきるに初あれ　仝

其の句もはし聚むり

春ちもやうしきとく家の月と梅　翁

上五句法最好句

ゆらやかに梅さかも香しく苗の色　鴟之
なごりされ星にさきとせんおまきの句　芽本
こちらへ心よかくも赤の声　芦波
かのまに咲菓餅をに垣の中　舟作

弓杖の西へさしあり秋の月　明沾
あてしその肉従へ風角力かな　仝
こぼれの子まつせしむかし后の月　仝
梢より一亮みのあるゝ秋の世哉　燕年
蝉の声の余をたゝめる枝かな　正相
きさらぎの目刺つなぐ凧の紐　扇車
松かぜのたえまを鳴か宗長舎　芦本
猿をおてかあつれし鳥哉　無衣
名月やよのふとき八茶のくへ　宗也
あるゝやあからし下りの名ゝ山　東潮
体つきの虹を渡しるもあらかな　其角
鰹の売八ちるしやくしあたりけく　句空

気の手本とす廻き句あり

下五句法

ゆく春や蔵あらけて花の草　野水
あの庵ハ角力好なり赤四角　岩翁
一とせや餅清く白のわきもち　万子
梅か香や業もつめうる本まゝ　仝

かねりの句法

星合やおおふれつゝ蕩らさん　壽宗
菜賞すハまかし其名みまれし人やふん　嵐雪
浮舟のきゝしき中へ解その甲　其角
酒のかゝし色猪すり解ぬの表
きそのしこ　樗良

うつゝきの野にハふところ火や　村俊

風流

山伏の装着てハ紙かりきかな　元雀

三都義

盥にさす月をなかめて涼かな　舟野

賓句法

浮巣得てなみたもとわね小舟かな　春雀

山家に蛍ハ浮世憐

菊の花あかりける山家かな　北枝

句体勝

もむ月に坊のぬるくる茶するのむ　桃先

一字句法

笠の露の侘さやぬるほと佳　流岩

四文字妙

名月を揚る家と鶏のうかれ鳴　濁子

かゝるとのく句法

一花よふくる節あるきのけいさ　虚谷

句法

春の花て八重咲る我の春しまハ　柿露

春の色へ八若とのしも春の春

昔ふり妙

旅人と来ても今ハ見る今日の月　欽吾

鶏の卵うまれて居植いち　其角

月かゝく明るこのかく小舟の家　仝

句作法

八ツ山の山のさくらや一ならひ　其角

くれしともむかしき東の除木かな　安重

思ふ所

馬の行下ても古き名所かな　珍夕

とかくしもおもしろし雨乞ふるかな　普人

相想

平家なり大平記にハ月もみず　其角

能なし結子ある人はぬきりの花　去来

小男鹿のかしけすや下かくろ　秀和

うちのくのはふ関越ん笠の態　杁月

花の実おてよき寄宜し

頃相妙　東山

京中をふれありのつわるわかな　荷兮

剃髪

西行のあとのめ笑きにわかれなる　仝

李白

李のかさはに酒を鯨ゆきわかれ　野坡

山雀の里様するりしるまと　去来

去る句

茶の花もうろうろ人なき買女　一勤人

脈

香花ハ雨ぬる人をかな　舟泉

書の名のあとも清しくまつ人神送　越人

送別

下駄でなくられ風の嵐のまゝ　一介

暮食一畳ちらしと余の記あれ

ちらと云課せし句

鹿は雨やもとるあを浮く流太郎　史邦

西行も錢の音も貝をあつめけり　野坡

餅の句梅しるを本の教ゆる余

はるしちらしぬ句

一とせや餅焼く日のわすれ水　雨子

末枯や寄る餅くふ家の山　其角

陰くけし餅くふあとのうれしさ　翁

餅花へ家名月の月より

此の句八代々の歌仙のうち

也四句とも大るのる本あり

拾遺

餅くらぬ旅人ハ杖し柳の花　盧元

鬼の子て餅焼くあひおぬ　妙行

子どもは寝く足らしかあきかく

拾

去年餅搗の音より雨の峰　許六

餅くふ後秋搗きまへつ哉　支考

上五の仕立多時一茶う好む所なり

流くと年の暮くも年あけの月　正相

是同令今余なとも八体作ることを
此文

鶯なく時ひかける　みとりの一声　安信

首三ヶ所にかりたり

稲つまの初手をふくなり松の世　野紅

手本とも無き句

春雨の降相かまりぬ羅生門　尚白

上八字訣中八とあまり下八ともあまる

二ヶ所ともあまり八下ミの下の毎

下ミの下のあまちたん萩の宿　越人

八字と云決くるる句

ころ賑やかとつこのこれより紅葉の松　蕪村

さくしこと

唐からし西依かたしおちたり　旧國

ちかめ子来山尚白等の老人の實あるす君ふ
きのるを吉すしなけあとのえくのるも不句
を使ふり古人を老成のたもりはましも吾ろ
なる浄瑠璃戯場のてまかくなきことく論
し侍る

わら人の所へわりなんしおかえる百人
一首の中まて大僧正行尊八字流法性寺の位
持あれはかくしちらすに値得するものも多かれ
一ゑらくらは筆入ぬ八字難きみけて俳人まか

なき詠の様くとゝもに気を思く
出さずの歌ハ古人の業なれを実なるなり
小町がうたしき乾色やく来るなるすなき雨を
詠ずるハてしをへしく漢土の詩をもとるても
一人ゝの心の来らなき居所のうたへるをハ作ずなり
作れたるハ両人対酌山花開一杯一杯復一
杯までハ詩人の天体のおもし酒に落ることを含
なり我酔欲眠君且去明朝有意抱琴来
もとハ李白が豪邁なるさき境界もこえ
わたるを杜甫が卜居の詩も清江一曲抱村流と
也てハ清江の一曲をまちて卜居の村を抱て
流れし実境ともを見えたる也古人手

なりと想像することも通俗漢楚軍談
三国志太閤記等の類をよみて韓信が殺
されしより高祖に仕て謀略をめぐらし
楚国の兵をも剿して誅戮にあふまく
信が心もとなく古人をわすれ後玄徳と
曹操がことを通も古人に殺され有様
悲み堪ざる所ともなりて浄瑠璃芝居を
見ても古人を思ひやれたるを善悪
のことよまし孝心貞烈の女も何れにも來て
あるを見ずとても其の者をも借ば
其うきりて自分の様をたのしみて古人の
行状をもとまらずともいまとせんなる八

つねに窓のもとに有りて筆跡をむねとするものゝさらに
わきまへ汲山の休の坊が此の保居に三十棒の痕
語なりさるを老にあらずして東籬耳の底にとゞまる
あまつさへ酒をこのみて瓢を集え耳にさへ聞
なく門生素材に何にもならず世にひろく人の耳
目をしるして風雅をわかちて松窓のみよりはじ
よみ給ひしも静にものしたるところにうけし斧柏諸
詞の人にしも見よりとおもふ人のむかしより先ばの流
ふみをわかつる罪なくありけばわかちしより唐に大和の
歌をよく味はなるに古語にもくはしく始めくらふ名詞
服をさくしてあられ尋常の俳諧者流のあそびを

いふなるや

傑出る鐵の中の雑のまじりある鑑し豪齋ともに
わまじなりかくおもふにやはきたりの奔の大なるさへ
入りられ小冊になされなしねかなくすや戸外に出して
此題をまじに事なるれ

天保辛卯之月

画流　楳窓布席著

此記ハやさしくにするものなりとそのおもむきハおのがやけ
の史にことなる次花鳥の色音なり草木の栄枯山河の只
住居人情の深浅にいたるまで眼に見る所耳に聞ものを
かれこれすらして趣つくれるさるものやハ何風居松窓乃
翁なるよりたれ〳〵の見にあらうをねりふすきをしたつめて
何らしきさとり山田の案山子に恵をかけてつゞなきし
弓に矢をあんえおきさせるらくゝあさぶかくとかふ海外の
漫遊ふらくぞにおよひやらせの春秋をそのまゝにある
せりちらひ楳窓老人その似ぬるよしの記行を梓ネし
あつりてよ箕またくちさらしめおとすそのおもむきさしの
まめやうな風左氏に似たりとも及ばし法師一具まで刪

訂者のちちにのりまつられてまつらそえけらる筆の尾
くるしくらききさとゑあせるふゝのおもしろきあれ

一具華杜多愚春

箱館記行

もろこしの毛延壽ともいふへき神の画師よおのれもえ二
らぬ身からちをしはかりせらるゝにはくまてもなるに写し侍りたり
されたら流失あしのらし八人ゝよまとえ世ゝにはゝと绝ぬられ
髪のゆふゆかの宿りまり昇にはまね氣佐那ゐかさすへ侍ふりし君の穐
からすまは山雀のあなたにて箱館の布摩ちかしにかへる何やらし
去年より赤人も限ふ欲をしなす侍りて蝦夷の左浮へ押侍ん
あそと契しぬ毒の上ふみに琵琶ふろしとふ志てかねて由くさ巴の
ふさをもなくすかんとて同行の太気の係ふ笠簾をきらし
立出侍れは人かきれかの山に住吉ありく
このみちの奥都とそなたうらとまり声
あそふしきくろのうさきくらの　皺
太呂

中妹の筆をきのふといひしふきはなくてゐるのはしこその
かしこ平角かちまて箕輪へゆく旅よりこひの粧ひ寸主
大盃みちくくと盛しつ流湯きれて酒をつくしてはふ廿日
ばかの行や天わかふりなはんてをし待しはしりよん風より
軒のむすびをたえれおやまふれ両師をしをきまる舟にまちをし
方笙花とはふたゝひきてりをんなるを見ゆる手何の鶴かおらん
唯ちあらしの神のたまりおきやうしよ幣奉承るをかさ原
風かくれどいふ離遊よつゝある中よ田名部の熊谷老人と
のかりそてえんおまきし行旅の悲しくもよりよろしき
るとも敵わ後の世しるこハころろふかる泊りくの志ある人の為に
成名のふるるはおろし筆しるしほそくね見の外見ちやすく人々
後見せはけみこゝなるよいとやすゝなれも考されかゝおも

そこくおてあくろはちきまる句にぬかける菅鞋振髪を
見えておのり出ぬ
ふたつ坂ハ青ふさぐりふさかりて今朝かけれる人々の行は
いらく隅見ぬるおそれそこをもわらぬゆくさきの気をとろ
きませうくあろふそくも林木平をも陸は八面ろつらくく
晴て岩手の山もことかよふむかうまちかくくるゝも

立康やかくらふ友るあれやらし年

其の人の松ハかしこの山をこの丘の巴よ送りむかひてあつらし
気をし平を労して孫よ入ふんとするに金勢の神ハむかし
ちり巻堀とい村の浦々家よ請されおかれあけ志年
久けあり座を流孫馬の中に享保四年四月吉日仙臺福嶌堂
文あつとかいふ名ありこれハ志しこうかき文々あもん先よ来て

待かぬる心地す。更に浦村の老松は百とせあまり十丈あまり
めぐる坐きの枝くしは人のはなやかに流ふるまひて梢に
とまり居る鳥も小やかなめならにかなさるされた金城の
柳の風をうけたるさまもふかき噂の外の空になびきて流
みもおもはしと思ふ

有所をたづねてまれまれ老
そあたりふ一夜は此の下ふし世にかくれきし此ころのふしを中
たりし人おもひ七時雨のさまは九重の門とるさの遠に
ら月ふとうの峰なるく七ツにわかまてるかちは此の山の
らた流く老これ世ぬ日なきまで名つけるといふ伝法の集
はへふた題号なれしと思ふすのとはる覚し
須賀内のうたすやるる巽の方に姫山と云ほうれる峯

さしき人を待つく立あるとき栽れつたなく名李を植て
なくなれのちしとて立てれらに老木栗は信なれば
吹きにはなれらくあまりまねくあたり
家旅は芭蕉翁にもらく蓑日記し
大ら人くよ世月来の二三年ねん名の泰は此待るとし以下文巴
兼好の高ながおもて下の自勝坐きるまでしれ老ふれもし笑みし
ふ春もからいはやく中山うらく馬の往来する所頭の君まさらの来やらも
のに蔵書す
むかしも柳と蛮との人みらの山伏にあり
近まりて流れさく流れわかくに君が為を
頁は八せくあきうかる
まるかとうの六

呂八郎のあ引犢鼻のみちのまへり形

一戸隆白こそおいて龍中の気をも訓らるる二級

しきりなりし紫少井花の新のまぜすやうり

傳清まるに百里を過ぎて邑の東の白山子は隠れて赤助

愛らし呼教阿るへかへしおもふかな松山は定まり時松の翁八

時夜の月のあはれなるをすゝめしきぬ言ひの西へ出せるに

世をかへるを築きしその高き事まことにをもく捉へすとて小

南より北のかたに石をならべて下まれり七里余もつゞけるは

男山とも名付しとぞ有る人八都と称へ八丈のかしら[illegible]

かの原瞎那は何ともいひけるやうに見えていつのきや

かくてけふ何ゆゑの[illegible]をいさ[illegible]

三本木平八郎申すに三本木といふに村何ともよしとて呼ら四顧

すゝまあのあふわつらく月中の桂の乳のくまのあるにか地すゞしくハよく

おけ原くらふの名産ゆゑにや盛岡の城あたりも網ともにあしし

うねもそくいけかの刃の屋形の御流にしもよ商人もほか旅客くるをもなきて

その價もなきゆゑに時外なる久保平三隆平なるも[illegible]まめ[illegible]の京都

名とし[illegible]推[illegible]きこえし

一人ハ皆信き老法師の風雅八金鐘

[illegible]よりまめきしめるまつしかるへく世の名つきし

なるうさるがのふ原盛きこの一人八丈法師の

師おゐひとへ人を居らふおかまへて恭哉

するもの

おもし者とてとえさる中にくく　趣すきし

者やし

月日　　棒園　平角判

七戸
柿木華中

佳月
文
盟誓亭中

かゝる風廻文あり［illegible］集内するに佳月の何値のとるを
みなもとのあらはるゝ何さるきし奥の杉とゞめて待ける[illegible]
すかたの[illegible]おの婦の螺咲間ゆくされ棒木華の勢
さくらのあり何とすへて忽ちけれて楼上より上る流［illegible］
尊きものく動ちたる新進作のかめは[illegible]の売集
さくもてよきの世を生れ実［illegible］の解る

あのこちにあつきあろくをし感すきハこの縁のはなちて
棒園の帷幄のこちにめくりしとる筆の東よりしつの六ハつの便り
何ちらかく何のもあさるきの花のあきめさせんとかくけなきの
何すりに棒園のまたもら会を含もて柳もたれかくそ
とも[illegible]ふてしをすれ中をもら[illegible]人の
まります[illegible]比雪をもちて聖地なる古る香とも
[illegible]ハ入佳の香をと風ま地のあり[illegible]
ちゝき何とりあるし
一日来りて松ゝ風の秋きこえ
あり佃とかの漬むかし出陣にめさしと小児の縁をしとも
何さも[illegible]作れ陣のあふすのなりと[illegible]のまの
それ陣のるとこへし八きくれ

浪のをとやあはれのきこえけるゝ猪ノ瀬く
海士泉郎さまいでゝ漕よせし浪のをとに呼てさまよひけるも
田名部熊谷氏八緒卿にゆかりし巨万の良材をし舟のあつめ出せ
おきなの家にいたりしが時にいたりの檜山より森田の東門
ひとなりけて土ケ山に相ひらきちかみ相さし二百余人をしの
あまりときくとゞまりし日をなり布川にいて老人数々
日のきこえけるゝ覇島をしなくさめぬ流
株園にしるし熊谷老人の陰を
行視錦裏の文をし詠けるにあの西
まかり新古へ出かけて通り詠て流れを
熊谷の相談ほぼしつゝ度着
右奥内村をりて木町にいたりしこゝに文

ちりする呼続をいて古名ちりの退屈
てるこの書瑞として中言石金ものり
ゆくゑの田名部をたづねゆき給ひし
田名部より起出て檜山関根出戸の三村の名八ツをもしきし山坂
をしのりふさくりて瀬川泥なる流は青あかつ鹿矢の峰八東に
ゆきて南よりきこえの名をのこしつ老にしを流てるの里大畑に
着ありて新谷元右衛門へかりやどる九月朔日より四日までゆるし給ひ
薬池大左衛門のよしよすみけるし老れなれ常盤園南とし
ゆかる今も末を流きく松ゆか久の事代八姫夷地の用の名相
人まくしまくちり寄り度海の舟のるも赤く昇るためくてし
家流色をとりつゝあまけふるゝゝし何る月何よりの露ヲ
さそ来れて去め家山の松杉めてゝく生て流三ちすのの別墅

また所々に厳の影のみちは能登の海月鏡おもの松露秋
潤ふるもの奥をしぼるるも奥ばり翻の酒を流まで
どうく紛ふの大園川糀の邦扇矢の崎化路なんとよく
見ゆる風景の上手筆をもつしめ

今ではふきし居るまもし時なり秋の千
千々里の濱ハ絶景にして頃は大小の浮巖秋のかく
乳のごとく伏虎のごとく洗牛のごとく奪虎のごとく鶴翔乃
ごとくあるもの霊芝のめぐむあるかたちを爾しあるハまた
きし行かれ搬ぶ汐近く八千々の風浪をのみて流れ別れ
まき八千万をも波のうちて合わる巌しまさに
さまりて白き雪のなけるやうなきらつと音でかくる声
甚八波のより須八春なりて奇を表すといふ風景あるの

面白さに斧の柄朽るも知らざるなりしと名所をまなばさ
旅の上ずハさるのしおときまのあそび志れるゝおとせさりなるに赤阪
の濱ありしぬそれより西風見晴間地ゆゝなりしに御おもへを
ききて大間地の牧地氏の旅館に入ね六日より大間なる濱ナ
笑館へおかるる舟待し待りまて八日やすませとて東風のおさまし
日なりさきけれバ大波の荒くひろとなきし是常のこともあまりく船の
ゆくへのままならず、それねやませし八東風を以て除より西より吹風
に八十八里いねねの誤ッ飛なる舟のあらしわあるゝくあり凪着る舟
すさまじくまのほとり風に樺えずなれバ力に及ばずともあやまちし
あくしく迄きし布摩らずも地八此よりさしむけて三るる七里といふ
きこ島もれのく間ハあまく大なるみえもれも天をかけ斤を
俟るもし郎しし人のなくせわてありてよ秋なりとつけんなるせん

ちる風なくてこそ

あかつきは波をさそふの月夜の船
あまたの人やまりにさわき行は都をおもさし　大畑松原のあの
集りて浦のくちみさる舟をしりにさし旅なる景色もおもしろく圍れ
にて〳〵やまとせのふくりをうる苫かけて二色の染の模様を
御ゆのまきかくりしつきすゝ流本とかゝるさくさしかけて

待るゝのもろ〳〵しきくのふきくるに
船待して日を経るに丑サン丑トモノ崎御ぬよろきらくあさく
凡みはなる舟小舟

戯せる浜笠やまとル　立田姫
姫君の日を侍る所あれなく
故郷の秋にうつくしたるなれ

下居る御法楽

笑能へかゝる彼岸の善なくもおもてをいのる奉納
冥加は毛幣の追風あり縁の海
ぐ風すそわたる海上く　舟の止ればふねは帆をおろし　碇を
おろして笛鼓のうちゝ山背とまりにさまりは候人志ふせ
こ流るゝ布席を轄来車をもしめ人く朱谷は於神禁を
のせて漕ぐ風迎氏の舟よ乗ふくるりかくなく　湯くらうちて
日さく良夜もいかにふさくむ急に老の今の精さるに清たし
おのく夜海の差あきもし賀しも浪ねむらくして揖元すの
笛のかさなの声入り絶てゆくく山に行よもりけるう
厂来舎る人や、舞色の歌子の初めとれ志ちらく　抱仙の詠を
あつるぅち倒の人〳〵まゝ集ひきこりてちゝ日の光に伝らく

なりぬるにしらふ声に驚かされて眼をさましぬるに伝ふ詠も麻衣たえ
翁の柄の持てなしあけなり月今宵
潮の思ふ寄る池かなきます初ちゝ鏡にうつりて映らちす
範阿の雲やむ極に家の入る
同よしのつり舟流中より見へゆくよりも見えたりて
菜のはな色八傳得たんしつくし舟
らしるの山さしあかりわたり流上に亭あり一貫とらふ擬ち
一翁の像めを掛て数株の松風をひく園は綿里先生の
草ほり蕭翎逸士の筆はるゝ主翁の言葉を見るに
たゆりみ文ければ盃の遠きを評流客かくさらに
幽花を添て俳句をわすれ
霧ぬし径をさわく流火韶まで

神無月十一日翁忌逮夜
夢ちけふろく聖なをしまつ庵し蔵あちる
斬も床月推使ふ者八このあらき一乗の有も思ふ寂栞
あれもわか来ありき祖翁のこの目なるの言語の詩の人くれ
ゆかし笠寺着て就に逢し楼窓にあかりて時忌をそ定とむ
翁の方をもされ志くれの宗祇あり
孫名精舎に蕉翁上人二十前人旅
流れ来りて幾ゝ年の風流も古庵木の末
今宵ふ臨しあふれの日の暮ちらくまちく備え行るを見て
をりなつかしさは何かき日伊行ける哉
駒まで雪やさらふ阿弥るゝ空にくらふなる山くちむかしの(?) 立延
書の影ふもあつし 杉山の秋の(?)

七面山釈迦峯なるといふ山あるに入るに付て
相くらべまうさせ給ふにしの吹きそよ風
よし行の手向けれ河風の八七面山に侍て千尋山とかいふ
頂に入けれ聞えせし徳のたくなるも清らかなりといふ亀田の
千代の丘にはし川あり万年稲の初がなりきらし花をめでぬる
みのりの手向なる詠をしもまうて屋なくなりけれ手むけをとりもつ
御代を仰ぎ奉りし蓑裡に康孫をも供奉にとりくなりしと
いふおほきしのゝ途にまうの氷の寺きさき数くされしもつまりけり
異なりし二条舎の南に付りて一日に吟歌頌に對せせし來る
念ま人山ハ元賓客元千代の丘八仙堂家の庫の傍尾にありし里之
待ちも吐きのにとはかくなる奇さりけれ
斧柄に手をかし遠ざかる国をうらやまきしのあるまりて松前青標花人

のまくらつけさしおかすふあらんあれば
飛きをりてなる流さる春の春の
西濱のわくみおほきよりはさふられも何をし久家の父母に世をれ
松前の森にたるれハ化ろびろみと世をとうるれおき面の日寿延を
つまるりてとうしぬに童數のめでてきしをう流す西崎おめでと
よりおりの松前の世にうきのなる道しもてあて佳哉仙ら
耳順をしあきなく
慶人ふむきなくのまて門とうして日の初なせ
おも目 茶讃りあきるく
よきなくあかまくとまのやくあの気
蝦夷八一番人とてヤモとヅれ象人ハ蝦夷とアイノと不様
風をしもユロ鮮イすると。ヒリカ米をアてとまあたくれ時晴の

人のあやしきことおもひ入れ歎かりしが　ちくとくまゝ使し　予
あらむも少なからく心とゞめつゝなかりしなれども
　芭蕉翁におもひ入れの一しきりの句
去年より芭蕉庵の旅寝に出て筆をとる夢の句みえ
さくらよりつゞきし傳来を
　おもひ女うしろも見せね　芭蕉　この旅し
文彦稚士の名む志の月の海はなき人の形見なしとも
いふなむ
　きのふ地の名跡のこゝろや人のごとく
弥生二日斧向より松島へ舟出し藤蔵地の沖を流
あらまほしのゝち乾きぬ　福島の西ならずみけるに僧岱

いふ僧の叶しかども舟の舳に帆のしかる事あはれ
忘れきあしと大声を出して船をとりよりたゞ流れをと
まし給ふ舎の人く一はずに梅ならし梅なくきゝなれける
ありしと立ちかへりしんは人もし尋ねもなくおはしかわたしなから
ふくの潮にまかせけ大波を凌ぎて岩飾のこゝ入れて乗るを
あまと流のくずるともしあはれにもし近付て舟をとゞめ二三尺
も沈みはいふも少しおそろしくてかたつきむけちちね松
雨くわたりて追風南よりしくなきし雨過ぎふなもとくなく
けるのくらくれ舟を乗るの姿色をもえかられ共をもろく急ぎしも
楫をやりよりして日々旅行に机場といふ猿のもとの　葉坊
日の影さす軒すらう流
　鯨うて雛えね家よとまりつる

あらひすゝきれくしらをはなめく不を集ふくさ八日四日を出
もとりして六日となるにこちやくとつふる子の御読の香
くるき飾の色など指に染めて眉のうへまくあかし見えゆ八日
のあしたより空のけしきわろく揺あきしふきあれの
その小舟なく運なせける時

　春の夜の夢ならしり帆ならしへ

ふりくきるならぬなしとおもふく五里ならはせの入り
混ふけるなく昵本ともを漢家子やとりを求むこそやおね
よりして堅のかたなる芦萱かくらひなくつなりのちい流
なとの口にある葦もてりよせ戸まくけるてたちらま非の
笛をもけむよりゆるる蕉竹なるに蛇の鼻の崎を東に
小田西をすく近し小舟をこく舟て鮑はく時浪の上を志して

は庭をしつきらなのをかむ油を入床具ならしいふまゝし
書なるものを莉十て来ありしり

　きせし今朝の雕よ何つ様わらぬ
　あくしと菊をひきみや家の中

潮さるのくそき枕をおろし袖を遺ふさらし蛙切の徹
夫婦の庭おなろく気をむねくしと風空なあらまなす
二更なかあろく何く風十日のあしと舟を出すゐやまけ御能
ふきあへうるく午時もろく子思ふ方の浣舒宮構よいさえ着ぬ

　海棠も咲てちぬ日の日泥のく

その梢をぢよりふくゐる岨をく伝ひ下りて欲ル宮子
あつまるをとはやしむ山ふところにあり愛んとくゝらふ北の岸
りくわうならなくしめくりゐて一さけあいくそうんなる谷底

みちの奥の苔むせる岩ねに泣しらとよせくる波の底
きよきなる松しの影もおもかげは浪にうつしてありけれ
ろくさハらしき中よりさしの曲趣をはなれり
　山ひかの神すゝむ峰の秀たかの声
月岬らもとに寄りせし日出月宗人の訪ひ来りしかわ
高くも知れをりける筆を採りて予とともにつれつれの日を
おくりぬ珠らにありつゝめれもの
　負ましけるまで花くるしし人の袂
青標老人はきそれに日くに袂のむかしあはれふ
　言の葉春よりも風流よりおもしろや
きかる中に衆生の哺育たるかし是左右をなきさし風
何とやらく子の肩くれしき　袷くの袖

ある日蓮社にまいりて
　祖師の御前にまいりてまつりもうしまれ
こゝに其の気をとゞむる木のみかれ
松府の人しかくを修し魂魄をまよふ色彩奕
る尓葉好む祖とちの水をまゝ八弥をしましくちらに
懐望楳主の春なり澄れ水をきし黄と白との二株
ゆる雄登の古尾の国桜ふくらす植えて今をなるとあらん
あの葉もくれかしこまる風しとあらむ
　あまりしくハあつくも斧の柄腐の日
ひとをなくさむ流かとその日をつりしおかんとする
よもくらく暇よそのものハみけるにと新をまいらんし
　東戸出ると侍人向し一炷の香をり

翁已の二ツより おもふ木をる記して此地の世ニ是八
有るハふるむましく光る身のそゝろ寒く解て光り来しも
ちるさむわりしのやうすかりしふのその魂をを振ちくあすし
ふりハ春宵言すへし
　すゝやとろく待まく出る山あかゝ傀の花
四十二歳の秋のむかしのうら不を射まかりける出えし
死おて
　一気もやうて北斗の星の下
去らるゝの林下よ唐くさきしるの此ツとらふ濱松あつまし
て宮のひとしとれふやさしあわれなる形何まし
　揺とまゝ虫見るふかせん小家さも
笠鉢くの伸緑知円山中九右のちまくのきわしく

まりせうおりと添う向の四十八流をちるりけるせくふ
　乃きふせろく若や梅の何まりきり
埜山のくしこの花ハ此ツたねしきふすれ庵の桜夜
のむくきしハ芽一の世の風のわをうふ何日ちるちす
　ふくる世の何やる若れや雛の音
きのゝえの軒端ちるきし七面山の奇景して何けくたもろく
あやわふく鳥ふ出れまし素月尼か風
　莫さけるく物くも見おて粽二把
有水雅叟の別墅に招ふ
　比あらりるか竟ちれの華このむ
加賀西丸くとほほうしをしめゝく
　葉の手代を知つしろ西丸くり

雨の真亭にて画賛

人静す渓の水おときこえけし

松前笠鎧ぞ床のうち待兼して

三度わし帷子着たりけり　祇

訪ふ人もなくて淋しさ

か

一つ家の海辺に立てし　秋のくれ

宇賀の大江を隔て二里ばかり奥に外月ぞ在村あり

人を訪ふ

名月や横ねる木のあちこち

古人と絶えて籠りて　まことの名吉の人に物語しつ

中納言も人の上に交わり徳に従ひし

祖父ち業山すよ戸みも咲にけり

キロヒヤの人六人ラウウの人にひとしく　なかなかに陣着けしとも

ともしくて遠く隔てて百里の身をしめしのぼれぬ背月の

高きその皆六尺有余すら長途のつれなや秋風に吹

かれ行く濱松のあたりを通りてしかども　よ所よそほし

市井に入りしを見るに

かの都のなかにも将に八吉兼

もろこしの何某将軍の老いてハおぼえしさらに知る由と

いへる如くて　かくよしより花をえたまひし右の方に

うつし月のそよりし風流八人の将軍をよくしる俺雨

老人と云ふ事あはれに此の地をくださるとて生きを越えしあつひ

ちよくあれば待養はず　公勢の外にハます風流来ての

ときまつねばかりし宇賀の浦にして　たち給ふ

春のはしめに 鶴の齢のちきりを結ふ人
まことにありかたき御めくみなれは
むかしかくや姫すみ給ひし月さえて あめより迹の期の
せまるをしたひし北山の中八春より清る水をよすかに敷して
しむかしを衛なりやませし流人のふるさと世にのかれ給ひの
かゝるもさし治おもれ老翁のふるひとわするゝとのらし
うたひつゝもおりふしあ山の名きゝをも絹舟誦たえぬ
馬のものおもひするをとゝめてのあとをおもひて ちかしく眺み
とまりたり
何さるわか文化年八本櫛一の紀

跋

日記まてる實をあらはし記行ハ吟詠をいつれとすと
いさるに此の業すきみハ吟詠すくなくれる實はあら
ぬかしろおのつから其の物をあらはし以て撰たらし
のちくかのさられみいとる者の名標となりなんのちと
おもはんまて

梅家老翁 書す

蕪村発句解序

句ハ解をかゝぬ座まに候ほとかく何あり作者の無念
なる中より出たる言外の言 意外の意 はた其顔かたち情を論
ひまきはなりさりとかくかつやかとの故なきとすれ其のむ所を悟
なりて初山ふかくのたもとの代 秘の奥ふく深入なきもの
あるは何よりかきしるさんとまゐらせむかへての備象の別當
ておかれし流老武者ありそれぞれの封 疆をもちつまりあるに 君侯
ふ催しくきりてすゝやと申さる鬢髪をなすまゝにかなしめん
のおそれもありかし其さて流まのあらたの流派もてきめて道
侍母のためにハたゆむ剱をたくさへりをゆるんの不足をいふかな
のこし一日社裏の何くれとまかりて夜半公翁の故あるをよりて作ある
ことも今ぬきいでて示すべくしてんとおもひけるに今ハむかし乙二両山

なきわ風天狗の坊のおハして髪すのさりの二くくときしおとされ
かくの席にいたる松の千解をもそへて倒の葉すめに書上へ
るをしあるらむ移よ易りて世に公るせんとす松の水もろの坊の羽
風にまをハ爪ろし岩城の二ッ箭の奇越の保彦山なとにわ
るよ了抱つゝ力りもあましき空礫のまつほとかハまされるの
ちりよまる浪にまかり

癸巳秋九月

一具道人

蕪村発句解

松窓乙二説

梅窓布席筆受
斧河社中校刻

琴心挑美人

妹が垣根さみせん草の花咲ぬ

司馬相如が故事なりさみせん草ハ
薺のことなり亀んじぬをもいふ
てらへの手にき美れにかきそれ
賈嶋が墨絵にて儒者みたるすの流と
戴叔倫もらのんをきらひとあり
僧房ニ逢着ス款冬花・出寺ヲ吟行スレ八
日已ニ斜ナリ十二街中春雪遍シ馬蹄

今去人ニ誰家とつふ詩をつくり
數冬花ハ藤の花のみ寺のちかき
ハ帝京也其角三百負の肉のうら
馬蹄今我をしきりて雅ら家とし
に成ともの詩より出たり

細手や 詩之事よりのものとし
漢の高祖の咸陽をめくり時の故事。
又頼朝の路業をたちより替代を
表合す也

ちらしあやをかさへ峰の山ふけて
一鳥不啼山更幽すちれ王荊公
詩なり 樹とせん 細ふるふと俗にきれ

て詩をあまし ころを味ふ歟

穐鶴篠首水ながき論のうちに筋り
顯昭ハ律僧にて獨鶴をおちる
私歎のまゝなれ儀をはけしく論弁
せり寂蓮法師ハ篠首をとりて
二人對論すりこふつゐられ志てる

井蛙抄にみえたり

加久夜長等かたきりなきし数ある
のてりき。古今部の入をもしめて
けさんな。引きなる侠盛しとて錦の
小袋をはうし 秋けんも流布と
思ひ出す。あ 詩 春 色 まくれ

偶ましも。
山ぶきや井手をながるゝ絶唱
花の名をいふなら鵜因法師伝り
長柄の橋の絶唱ハ帯刀井手の
蛙の乾物の古名ハ鵜因之
斎唱のまつりにふられて書くこと
古今集に「新古今集」
別記のあらわるゝも知られぬや
と云るを、斎唱られ新古今集に
ハ「新古の事」山ぶきや井手の
著なり秘伝ならんにあるまじ
き何るをしうかゝと聞り斎唱の

梅といふハ新古今の名と惜る無
花のちりくる子ども知る花
散ふる事家のことを尽るを
もて是く味ひあるべし
一片花飛テ減却春ヲ
きこそ詩人の詩や減却以
一片花飛て減却ス春ヲ。といふハ唐の
杜子美が詩句一片なりともいへバ一通
にも春ぞへるといふべし。却字ハ
忌却失却ホの却字とおなじく
熟字なり

苗代や鞍馬のさくらちりにけり

やの字にあるを付合し

春景

菜の花や月ハ東ニ日ハ西ニ

あの花や牛のつなかる小ふねかな

此二句ハ語外のをもむき

菜の花や鯨もよらす海暮ぬ

南ハ摩耶西ハ摩耶の通し兵庫の

うらすなく菜の花咲りあるの

その田舎の詠るものとみるへき人

ハうとしの景をいへり

炉ふさきや床ハ維摩ニかけかへる

維摩居士ハ一丈四方の室ニ大衆

を集めて説法あられし維摩経

よって一丈四方なるをハち方丈なり

和尚ハ床のかけものを梅のかけ

絵ぬきつ床ニかけかへたるなり

燈のかげとりまさき徐二の絆

提のさまゆふかしき

ゆきき香にふかくかけし

かきつけあつく香のゆきをふくあり

わすれ給ふなかけ　東四郎二郎

四郎二郎ハ吉田明ヶ俗名なり

らふ

岩くらの狂女恋せよほとゝぎす

ほとゝぎすよりも出て岩くらへ
流ふるゝ川原く能楽のものぐるひの
体をおもはせ狂女と狂言志らんとさせる
にし湯浴場のごとく小竜にして
とまるまでたのむよしとて

廣翁のうさゝせや天の一方に
文選の詩中ニ相去ルコト万余里各
在天ノ一方

山ハ人なり路たる人ハ旅ゞ行かる
かく作りなることと考ふべし

これのや芦のあらはく蟹の泡

武句ハ大なるさくらなりや
るへし

探題浅大

これはあそを眼にしてさしつきまれ
仕おる納言枕草子に太と為凡と
よむなるを書り

墓の中の事を武君と申せしなれば
むかし鮒ハ鮒鄭の事なれば鄭恩
てハ小鮒すゝきまぐわ鄭ぐ絮
晋の王子猷が仲を書して武君と
いへし事なのよし

窓の灯の楊子の古跡ならぬや

保ちうり「寺町や表のわりきかな
灯ちけさす上総にある本つされたる寺
町もあり二すりにありける所々多けれど
しかし寺町ハ後にも記さる五文字な
是ハ雪かれあり舞の句と大世界
あるまじき事なりとぞ見ゆる事なし

くハうせ予始めの味も尤く沙川に
給ふなるときにも其の余情ハあるまじ
書懸きをやさしくまして上風の五文字
よりもはる事なし　始めの人々俳句の人々ハ
書おくまじ

老翁風し将棋にてしハ之元わりぬ
二人しらぬ世のかをさみなる所作なる
一さしのたわ将棋の眞を詠なし
陽て八十相合ふ御句しくるか
秋田の五十句の内に此句ハ伊勢風の
作をさとして法をさく老翁もしより
中七下五を賓隠して又二人しる一人ハ
陽流の流直下の俳諧して八陽
まくらさ其の詞を人のものとなしたる
常人と大家のけちめをも定め難く
氏小象の風あやおもえし　隠君子

並乱しうさい官人の漂泊して旅寓
にかゝりしをあはれみてかゝらせける
作なり唐詩選子青門芸子種氏作
まかりせは不老かたりて味噌
春蘭そゑの河より依つく松ヶ岡
松ヶ岡ハ鎌倉の尼寺にて英勝寺と
いふ春蘭を智の尼をとゞまらせける
檀家の昌法し法然上人の一枚起
請は尼寺の尼入なとも出り
祇園会や僧の訪ある旅の許
七夕やよく歌まゐらく旅の宿
其角なり

祇園茶屋せの折女と云ハ三ツよゑ
なり大雅堂の妻玉瀾ハその孫
にあるといふ
南條といふや不二の祇北の小家より
宗鑑に贈りたまふ大臣の歌
例某寺上の宗鑑の汝めをこそれハ
かさつだしところに春んと云ものハ
名の序あり宗鑑こし深さ改上人
技東隠逸伝を著さらし宗鑑
きもみる更なりしをは旅に凡俗の気
なりとて載せざりしと見えさすと
けるの非なりといふ説もなり

表さあしくおかひの茶もまろきより
墨子に白き糸の潔きも染りては
染なすまゝに色を変す人の心も
またむくあしきなかまともがらの
好みにしたがひて本然の気質を失ふ
とかくある一ト句なり

梅ちり清水の上石ところし
悪き世の中にすんでハ下をつれてよむ
あつしのさむくもあさまかなる下ぞ候へど
世よう見しうくも芸あらいてあまねし
蝙蝠も仮名さまよきハかハうもし
うるすのそくよあるはなる盗つれ

まいしをふな陸つきはおもし・なへし
とハよむつもれ・
永西法師ハさうしかきしすきもの傳
世をまろく二ど世み来たれた
秋ふくろうきをしまず植への歌わ
つれしるまで芸薮斗の歌一首
種のまうきのるよみのふうをと
百家の俳よあしとをもつ
なとくハしく論しるまへく
路々くの歌よまうさきし毅これ
路々くらいふりし始するなめり
化けうる俳家なとをしらんども

身にしむや桜川の衣にすゝれし時
すゝみしハ清ふなるなり
風をうけてすゝきやらの木槿の花
葉ハ綱の如木槿ハ槿花一日栄
とて・朝に咲て夕に落る凋む
むくけにまきしかり名をつくり
より・俗俗のたのしみにかはれ
花や世をしまの茶屋の名物
名月あそこにて涼をめぐる
味ふかし
あかくおもしろれなれて月をみ
見く「暑れもそとあそびて中くし

風韻ある風流・あさきものにハ
あらきなり
月天心貧しき町を通りけり
詩に月到天心処なり・はのまれ
中の天なり天心ハまことにきし月
更るきありてハ佗借なし
古人桜竹を思ふ
春雨の桜井をうつろいて佛も
五妻の風調をおもひし人のへ
あめ日はるゝよし桜井を咲峨子
ト見せる也 古桜の二字の言
らぬ無きをしつけ無し

三径の十歩にして蕎麦のはな

蕭翔といふ人三径をひらきて
松菊竹を植しといふ故事を
用ひて秋の身の隠れなしといふ

甲斐がねや穂蕎麦の上を吹く境車
甲州ハ蕎麦のよき境運送
するなり

百々の鯉まりをえらく すゝきハ
つれくなるにいきてゐる也

甲賀流の志の如の猪や夜半の秋
前太平記に甲賀流の事を江州
の甲賀山にありといふ伊賀甲
賀の侍ハ忍の術をよくす事
一ときは世に侍ふものなり
秋きよし百太夫の駒むかふとき
月の字見例しあり
日てらし役人の小菜芸氏より
此句流行して見るべし

ゆるくさらせん投壺 東の花
投壺ハ礼記にありて壺を並
矢を投げ数を定めとゞ家園猶
よい壷もちとし役名ぞ受けり
京都其の外ちかきたりしやすく流
行せしとなん

言籠

西行の真具もいろ〳〵あるなかに
西行の発見に言籠の文字を
とりたし放下の井銘あり
門前の老婆子薪貪欲に一睡
もきあかや通夜の運歌のとおれ月
老婆子ハ嗔老婆めのことし又ハ
男女の通ひ旅なりまいしもき哉
の身にあてうしくやれも口
づけや旅し
鬼みるや於内の中の鼻に慶次
鬼貫ハ伊丹の人に慶次とハ

ところを度を取うく取る次め鼻に
とうしおさるる札なり
浪花に挽行きまらく芭蕉忌を取りなみ
なる二柳翁か
叢竹菴の衣鉢傳えらく時雨れす
六祖檀經に句を放て六祖慧能
大師に六物の門三衣一鉢を以て事す
素里ら東武へ入て衣をおくる
嵯峨まし一いう先くされるかしてなる
「明けのかまし嵯峨の鮎」名に都なる
鼻むなりさえの桂川を鮎の名物
ならはするをさあるなり

小野〻の山家白木の窓楠の阿あめいき
秋のせのふかくつもりて阿あめし
小野ちくハいてし　廿七生るらと云房を
妹尾の呉人ハをかし　ふく〻とけ
呉の張翰と云ふ人朝へ官すつきて
あきらくら世の乱れんするをしりて秋風
のふくるにつけて・故郷の鱸の膾ある
菜の風味ハあるとしとて官を辞
し歸りし・呉にハ松江の
鱸もよく名高し李白か詩にも此行
不為鱸魚ノ膾ニ自ラ愛ス名山ニ入ル
剡中ニとも詩にあり

蓑虫のねさへのかとしきつけしくさし
楠の籾をしえつるわなす蚊ぬれうれ
古傘の傍の婆と云ふあのしられうか
ありあの二句見る所をそのまゝ侭
しるしや楠ハ常盤木なる大木の陰也
まさ古傘の婆くされ侍すくそく
うらちるほどかけなれし
あとあるし漂母か粥をもうけれ来
韓信ニ食をあたへし　漂母なる
漂の家ハ西楼よき庵
蓑やらの森見つきつゝ〻まう飡

他人の處にハ只秋色梅ありし
風流高士ハ岩に腰かけ鐘聲を聴ける
義の画にハかならず寒月をとりあはせ
其色なり　西行　信の画やうに見す
まし其義の声　を感するなり
重ねて加茂の氏人　高　傳　ありて
馬の家で連歌をしてとるに馬をて
うる世の事ニおもしろきを見るにありり
上ハ加茂の家下ハ勝の家なり
故人嶋亭うき妙なし　歸路て陶處來
れ是東山西行に吟行して荘溝とて
晦朔の代謝をまつ帰期の世をおくるを

いかんとて世をる　来なし
手をさし梁の月のかつてこの花
白ハ日と秀ハ月と月白の風
のるの佛説に見ゆるなり又荘萬ハ
月日の世をわたるにたとへたるもと
なるべし

陶弘景贊

山中のおもし中のうらんれ一つあり
陶弘景ハ晋代の人にして松風を愛
しく華陽山に隠居して陶隠居
とよぶ　帝たびたび政の事を問はせ給ふ
ある時ハ使者をもつて問せられて

決してゐらぬ時の人山中の宰
相と呼なり
その時のまゝに住つけし所 晋子が信に
うちむきし嵐なから懶に幾ふ
白つ見せや ふまんせしうち東山
目うつせや暁かきけ下郎の樽
晋子か句く 漢楚軍談に徐
張良か故よりく ふとん着て寝たる
すかしや東山 嵐雪なるし
執る蛇足をさんと 愛の余
蜷川執るゝ一休禅師の徒を信
なる人多我の蛇足ハ画人なれ

武門の人にして一休の画の師く
菟に表太ゝ雪に君何ゝ神たゝきし
京に表具師太斎といふ風眼の
老人何となく畸人傳に休め
守古なる八賢にてありし 寒芹鳥
寒芹鳥仏説く
黄なりの鳴や御寺の 羅生門
羅生門あとふみくるまつくる 手本に
あはなく春の画御揖なくなりね
羅生門 尚白く
手ひとつほもるや 雲の小まちか寺
雪の字 大きくなるよし

角文字のいざ月もよし牛祭
牛祭ハ太秦祭也。九月十二日
なりけるまでとし。又牛祭画巻あ
りとかや古画なり。つれしきまに
角文字の歌ありいざ人まつりんに
さたなき也

傚素堂
乾鮭も琴に斧うつひゞきかな
蘭素菴素子の画見侍るさふらん
祖翁曰。素堂子。蓮をこのみて侍
きまも八一句のくみぐく都きに称ふりとぞ。
老の琴に斧うつとつる 熟洲旧

秋の夜庭淋しう便りて窓のもとにひとり灯火を
かゝげ物さびしきおりから栗飯象長夜夜半叟の敲す
まにつら添りのを援書して是れ来らり是を詠し給ひ
たとへにつまして期に仍られを以て伯牙の琴の音
をきゝわれ彼因に聞えきさま充すかへる事あらかんか
くするになひくれてれ自ら先師の蕉翁をと記あきらかなる
あとのくもしくを思ひ出ものをそれに蛙足をしらくにつら
きまに蕪村か解と疑しうるハいと吟呼なるよきはあらの
あはれなん人子期彼因のもりふをも捨えて丹石の声を
しろし玉振ありし聞ゆるなん

天保癸巳秋九月

棲雪庵　布席